様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７００１８

研究課題名（和文）『中辺分別論』の未解読チベット語註釈写本の研究

研究課題名（英文）Research on unstudied Tibetan manuscripts of the commentary on Madhyanta-vibhaga

研究代表者
松下　俊英（MATSUSHITA, Shunei）

大谷大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：１０６１２７６５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、大谷大学図書館所蔵の文献に収められている、『中辺分別論』のチベット人による註釈写本を研究対象とし、当該写本の読解に主眼をおいている。古代インドにおける仏教大家の世親が註釈をなした『中辺分別論』は、安慧のサンスクリット復註が現存し、それに基づいて、現在では唯識思想の研究が盛んに行われている。
　しかし安慧釈の写本は右側3分の1が欠損していることから、文脈の意味内容を把握した上で、チベット語訳からサンスクリットを想定することが必須である。このことから本研究では『中辺分別論』の内容理解の一助となる当該写本の読解を行った。そして、それによって著者問題や唯識思想展開の課題が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This research project has primarily focused on understanding the contents of the various manuscripts of commentaries on the Madhyanta-vibhaga by Tibetan authors that are held in Otani University's library. The Madhyanta-vibhaga was contains the commentary of Vasubandhu. A Sanskrit version of Sthiramati's commentary on Vasubandhu's text is partially extant and currently serves as a major resource for research attempting to grasp the content of Yogacara thought.
　However, since the a third of the right side of the extant manuscript is missing, it is necessary to use Tibetan translations to attempt to fill in the lost portion in light of the content of the extant text. Therefore, this research project focused on understanding the Tibetan manuscripts in the Otani collection that help in understanding the content of the Madhyanta-vibhaga. Through these investigations, the problem of the authorship of this text and various issues in the development of Yogacara thought became clear.

研究分野：人文学

キーワード：インド仏教　瑜伽行唯識学派　『中辺分別論』　チベット語写本

１．研究開始当初の背景

大谷大学図書館には、北京版とナルタン版という二つのチベット大蔵経が所蔵されている。さらに、チベット大蔵経以外にもチベット人の撰述した文献が多数所蔵されており、これらの文献群は「チベット蔵外文献」と言われ、大谷大学図書館でしか現存を確認することのできない貴重な資料も含まれる。

現在、大谷大学図書館所蔵のチベット蔵外文献は 4103 点所蔵されている。その中、本研究対象の No.12827 *'dBus dang mtha' rnam par 'byed pa'i 'grel pa*(中辺分別論の註釈)'は、ヴァスバンドゥ（世親）が註釈した『中辺分別論(*Madhyāntavibhāgabhāṣya*)』をウチェン書体で書き記し、その行間に細かな註釈がウメー書体で書写された写本である。

『中辺分別論』には、スティラマティ（安慧）が復註をほどこした『中辺分別論釈疏(*Madhyāntavibhāgaṭīkā*)』のサンスクリット写本が現存しているが、当該写本は右側３分の１ほどが欠損しており、その部分についてはチベット語からの還元梵文が求められる。ヴァスバンドゥ釈を引用する部分についてはヴァスバンドゥ釈からサンスクリットが僅かに回収できるが、機械的な単なる置き換えの還元ではなく、説かれる内容を文脈によって十分に理解しなくては正確な還元は困難である。以上の点から、『中辺分別論』の内容を厳密に理解するために、No.12827 は欠かすことのできない貴重な資料といえる。

チベット人による『中辺分別論』の註釈は、非常に数が少なく、ゴク・ロデン・シェーラプ（rNgog blo ldan shes rab, 1059-1109）、ロントン（Rong ston, 1367-1449）、ジュ・ミパム（'Ju mi pham, 1846-1912）、ケンポ・シェンガ（mKhan po gzhan dga', 1871- 1927）による 4 点のみが確認される。

本研究対象写本は、字体から 12 世紀末までに遡るものと考えられ、ゴクと同時代か、少なくともロントン以前には書写された可能性があり、歴史的価値も非常に高い。同様の文献の存在は他に確認されていないことから、当該写本は『中辺分別論』の内容理解を助けることはもちろんのこと、『中辺分別論』のチベットにおける受容史を解明する点で重要な文献なのである。

２．研究の目的

中国、チベットにおける伝承の両者とも、弥勒の五部論の一つとして数えている『中辺分別論』は、ヴァスバンドゥが註釈をなした書物であり、それにスティラマティが復註をなしたサンスクリット写本が現存している。スティラマティ復註を手がかりにして、読解困難なヴァスバンドゥの註釈を理解することがインド唯識思想研究における一つの方法である。

しかしながら、ヴァスバンドゥ釈は短い文章で簡潔に解説するのみであり、スティラマティ復註においてもサンスクリット写本の右端が３分の１ほど欠けていることから、ヴァスバンドゥが意図した意味とスティラマティの説示する意味とが必ずしも一致するとは限らない。たとえば、両者が理解する「三性説」と「入無相方便」の関係である。

早島理氏（「瑜伽行唯識学派における入無相方便相の思想」、『印度学仏教学研究』, 22-2, 1974）や阿理生氏（「瑜伽行派の仏道体系の基軸をめぐって(1)」, 『日本仏教学会年報』, 54, 1989）等は、『中辺分別論』において三性説と入無相方便との関係を認めたうえで論を進めている。中でも、三穂野英彦氏（「*Madhyāntavibhāga* における三性説の構造―特に入無相方便との関係において―」, 『印度学仏教学研究』, 50-2, 2002）は、『中辺分別論』第１章第６偈に対し「唯識が獲得される。それに基づき、対象を獲得しないことが生じる。対象を獲得しないことに基づき、唯識も、獲得しないことが生じる」と解説するヴァスバンドゥ釈について、直前に説かれた第１章第５偈の三性の定義を適応させて、対象を遍計所執性に、所取・能取の無相を円成実性に、そして虚妄分別を依他起性に相当させて「三性説」と「入無相方便相」との関係が認められることを論じている。

これに対して兵藤一夫氏（『初期唯識思想の研究―唯識無境と三性説―』、文栄堂, 2010）は、各唯識論書における三性説と唯識無境との関係を考究するのであるが、その中アサンガ（無著）作の『摂大乗論』について「これまでは十分に関係づけられなかった瑜伽行の実践（入無相方便）と三性説とが彼によって初めて明確に結びつけられたことは注意しておくべきであろう」と論じ、『中辺分別論』の偈においては「三性説」と「入無相方便」の関係が見受けられないと主張している。

以上の両者の見解の相違は、ヴァスバンドゥ釈とスティラマティ釈による「対象（artha）、有情（sattva）、我（ātman）、表識（vijñapti）」という所取・能取の相互関係理解の違いが起因しているといえる。

このような問題は、第１章第１偈から第６偈にかけての議論なのであるが、本研究対象のチベット語註釈は、それらの偈に対して膨大な紙幅を割いている。以上のことから、対象写本を精査することによって、上に述べた問題点等を解決することが目的となる。

３．研究の方法

本写本は貴重文献に位置することから、写本本体を使用して研究することはできない。よって、はじめに対象写本のデジタル撮影を行った。ウメー書体が非常に微細であり複数枚の撮影は不可能であることから、一葉のみの撮影とし、全 55 葉の正確な画像データを作成した。その画像データを基に、翻字テキスト作成を行った。翻字テキストを作成する際は、当該写本の『中辺分別論』の偈については、北京版・デルゲ版をはじめとする大蔵

経各版のテキストに加え、敦煌出土チベット語文献『中辺分別論頌』(Stein: No.639) との対校を行った。同様にヴァスバンドゥ釈についても大蔵経との対校を実施した。

４．研究成果

(1) 研究対象写本の体裁は、全55葉、縦11cm、横63cmの大きさで、『中辺分別論』の偈をウチェン書体の朱字で書き、ヴァスバンドゥによる註釈をウチェン書体の黒字で書き記している。各葉の行数は、1葉目は3行、2葉目以降は4行で書写されている。

この写本の特徴は、『中辺分別論』が記されている行間に、ウメー書体で細かな註釈がほどこされている点にある。そのウメー書体は、再添後字の“da”を付加した文字や、有足字の“ya”を付加した否定辞などが多数見られる。このことから、当該写本は、ウメー書体の発展過程にある書体であり、敦煌出土チベット語文献にみられる書体に近い。

ウメー書体で記されたチベット語註釈は、複数の行をもち、コラムのような形式で、ウチェン書体で書写された『中辺分別論』の行間に点在している。コラムとコラムの間が不明瞭な場合があり、またそれぞれのコラムが『中辺分別論』のどの部分に対する註釈かが明確でないため、まずは細心の注意を払い、各コラムを区分し、そのコラムごとに翻字作業を実施した。

(2) また、本研究と関連する写本が、ナーランダー大学・博物館、ジャワスワル研究所、ラクナウ博物館等に所蔵されているため、平成27年3月3日より同年3月12日の間、上記の博物館等の写本調査を行った。その際、本研究対象写本と特に関連する資料のリストの作成を実施した。また、ナーランダー大学では Buddhadev Bhattacharya 准教授及び Lalan Kumar Jha 教授との情報交換を行い、現在のインドにおける文献研究状況、専門的知識の提供を受けた。

本写本の冒頭部は、『中辺分別論』の著者に関する情報を示している。先にも示した通り、『中辺分別論』は、チベット語訳・漢訳ともに弥勒の五部におさめられ、マイトレーヤ（弥勒）が偈頌をアサンガに伝え、それに対してヴァスバンドゥが註釈を施したものと伝えられている。マイトレーヤは兜率天に在すると伝承されることから、実在性の真偽が問われるのだが、まずは『中辺分別論』におけるマイトレーヤの位置付けを理解しなければならない。

ヴァスバンドゥ自身の註釈には特定の名前は挙げられてはいないが、スティラマティ復註では偈頌の製作者をマイトレーヤ、それを伝え語ったのがアサンガ、註釈者がヴァスバンドゥだとしている。そのうち、マイトレーヤについては、煩悩障・所知障から離れて無住処涅槃に赴く「善逝」だとし、さらに菩薩十地のうちの第十法雲地に住していることを示している。そうであれば、アサンガが瞑想上で出会ったマイトレーヤを想起することとなる。

このことについて、勝呂[1989]は、『中辺分別論』が「弥勒という特定の人物に帰せられるものではなくて、もろもろの仏やそれに準ずる高位の菩薩たち一般に通ずる普遍的な教えとみなされるものであり、それゆえに漠然と＜善逝の子＞を教主とするように表現されているが、それを代表するものとして弥勒が立てられているのではないかと推定されるのである」とし、ヴァスバンドゥの時代にはマイトレーヤが仏・菩薩の代表的存在という性格であったが、後の時代には弥勒信仰と呼ばれるほどに、一教主として論の語り手を担ったと論じている。それ故「弥勒は実在の人物であるよりも、論の教主・作者として仮託された存在であると考えた方が合理的であろう」とする。さらに、『中辺分別論』は、アサンガが偈頌の編纂者であり、ヴァスバンドゥの註釈とともに並列して作成されたという。

これに反して、金[2007]は、上記引用が『釈軌論(*Vyākhyāyukti*)』の変化身を説く箇所と非常に近似していることから、スティラマティは、ヴァスバンドゥがいう「善逝の身体から生まれた」という一語に『釈軌論』の意図を読み込んで、上記に引用した註釈を作成したとしている。そして金[2007]は「弥勒論書にも大乗経典に準じる性格や権威を持たせるために、世親は帰敬偈の＜善逝の子＞にその意味を密意として入れ込み、安慧はその意味を生かして解釈していると理解するのが極自然ではないか」と論じ、勝呂[1989]がアサンガを編纂者とすることに意味がないことを指摘している。

さらに大竹[2010]は、『荘厳経論』、『中辺分別論』、『金剛般若波羅蜜経論』のそれぞれの偈頌をマイトレーヤに帰すべきであることを論じている。大竹[2010]は、(1) 各論において「虚妄分別」が共有の意識をもって用いられていること、(2)「界増長」という用語が用いられ、それが後に種子に置き換えられていること、(3)『荘厳経論』・『金剛般若波羅蜜経論』では、法界における諸仏のありかたが不一不異であるという共通点があること、という三点を示し、これらの論書の偈頌に「アサンガやヴァスバンドゥが用いない用語や思想をも含む。ゆえに、この頌はマイトレーヤに帰されるのが妥当であるし、そのマイトレーヤはアサンガの匿名ではありえない」と論じている。

以上のことは、スティラマティの註釈や他のマイトレーヤの著作に基いての議論である。本研究対象写本の冒頭部にも、簡潔ではあるが、著作についての記述が示されている。

まず、写本にはウチェン書体のチベット文字で Madhyāntavibhaṃgavṛtti という書名の音写が記され、その直後にチベット語訳が示される。加えて文殊師利法王子に対する帰命の

偈頌が説かれる。その当該箇所の註釈として、ウメー書体で「この論の偈頌は弥勒によって造られた。註釈はアサンガによって語られた。これの復註はスティラマティによってなされた」と書かれている。その後には、自身が信仰する神性を尊敬して註釈を行う旨が示されるていくのだが、このような註釈はスティラマティ復註に類似している。スティラマティ復註でもそうなのだが、神性を尊敬しているのはヴァスバンドゥなのである。この意図をチベット語註釈は汲みとって、その直後にヴァスバンドゥがマイトレーヤと自身の師であるアサンガに帰依していることを表している。

以上のことから、偈頌がマイトレーヤ、註釈はアサンガ、復註がスティラマティであることが明らかにされた。さらにマイトレーヤ・アサンガの名を並列に挙げている点から、当該写本ではあたかもマイトレーヤをアサンガの学兄の如く見ていると考えられる。それはヴァスバンドゥがマイトレーヤとアサンガに帰依することの表し方にも一致しているといえる。したがって、当該写本に限っていえば、マイトレーヤはアサンガが慕った実在の人物だと考えることができるのである。

ただし、不可解な点がある。それは「註釈はアサンガによって語られた」の一文である。伝承通りであれば、作成者はマイトレーヤ、語り手がアサンガ、註釈はヴァスバンドゥ、そして復註がスティラマティとなるはずなのだが、ここには註釈者はアサンガだと説かれている。註釈を意味する“'grel pa”はスティラマティ復註で明らかなように、ヴァスバンドゥが註釈したことを意味するチベット語訳である。これには何らかの意図があるように思われるが、現段階ではこれ以上の手がかりはない。しかしスティラマティ釈と同様、ヴァスバンドゥがマイトレーヤ・アサンガに帰依していることを、当該写本は示していることから、伝承通りに見て差し支えないであろう。

以上の問題については、他文献との精密な比較検討を行い、報告する予定である。また、対象写本のテキスト校訂及び翻訳研究も論文に掲載する見通しである（「５．主な発表論文等」の欄①参照）。加えて、「２．研究の目的」で示した、ヴァスバンドゥとスティラマティが理解する「三性説」と「入無相方便相」との関係性についても同じく『仏教学セミナー』(第 105 号) に投稿する計画である。それらによって、インド・チベットにおける唯識思想研究の一助となるであろう。

＜参考文献＞

①大竹　晋「ヴァスバンドゥ『金剛般若波羅蜜経論』『十地経論』について」『仏教史学研究』第 52 巻第 2 号、2010、1-22
②金　才權『『中辺分別論』における三性説の研究 ―三性説の形成とその思想史的展開を中心として―』龍谷大学博士論文、2007
③勝呂　信静『初期唯識思想の研究』春秋社、1987

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

① 松下　俊英、「『中辺分別論』チベット語註釈文献の研究」、『仏教学セミナー』、第 104 号、大谷大学仏教学会、掲載決定済（2016 年 12 月、査読有）。

６．研究組織

(1)研究代表者

松下　俊英　　(MATSUSHITA Shunei)
大谷大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：10612765